第 37 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

今年度の北海道建築賞委員会は、昨年度よりの新体制の 2 年目で、2012 年 5 月 9 日、札幌市内で平成 24 年度の第 1 回委員会を開催した。今年度の審査方法を審議し、日本建築学会北海道支部として伝統ある本賞の主旨に沿った作品を審査することを委員全員で確認した。その後、応募状況を検討し、委員の中で注目に値する作品を「2011 北海道建築作品発表会」や他の発表作品などの情報をもとに議論し、その中から委員からの応募推薦対象作品として 2 作品を選び、各設計者に正式な応募手続きを依頼した。第 1 回の審査委員会は、5 月 18 日に開催され、応募作品が 8 点に前述の 2 作品を加えた計 10 作品を今年度の審査対象作品とした。

応募作品及び応募設計者（応募順）：

- ① さくらインターネット石狩データセンター（安田孝君／大成建設（株））
- ② 幌延町生涯学習センター（川上雅彦君、小泉裕美君／北電総合設計（株））
- ③ -1 知床五湖フィールドハウス・知床五湖パークサービスセンター（知床五湖パークサービスセンター）（川上雅彦君、宮越達也君／北電総合設計（株））
- ③ -2 知床五湖フィールドハウス・知床五湖パークサービスセンター（知床五湖フィールドハウス）（川上雅彦君、宮越達也君／北電総合設計（株））
- ④ 陸別小学校（小谷陽次郎君、廣重拓司君、岩村友恵君／（株）日建設計、（株）北海道日建設計）
- ⑤ TU 3（植田暁君、植田晴日君、菊池規雄君／NPO 法人景観ネットワーク、（有）風の記憶工場、ワンダーアーキ建築設計事務所）
- ⑥ 宮の森の家（前川尚治君／（株）コウド一級建築士事務所）
- ⑦ 函館市縄文文化交流センター（石黒浩一郎君、菅沼秀樹君、金箱温春君／（株）アトリエブリンク、金箱構造設計事務所）
- ⑧ 真駒内 土間のある家（遠藤謙一良君／（株）遠藤建築アトリエ）
- ⑨ 神楽岡の家（加瀬谷章紀君、網川大介君／国際ローヤル建築設計一級建築士事務所）
- ⑩ 札幌市円山動物園 は虫類・両生類館（斉藤雅也君、塚本篤士君、柳谷宰君、岩本康治君／公立大学法人札幌市立大学、（株）アトリエアク）

審査における評価の視点として、これまでの選考の視点を崩さずに、計画理論や設計・デザ

インに対しての新しい挑戦や問題意識、新しい生活・環境の構築を 目指した意欲とビジョンに 対する「先進性」、自然、環境、人間社会総体を含めた時間的、空間的「規範性」、それらを 統合して建築としての高い質を確保する ことを目指す「洗練度」の3項目を共通価値とするこ とを最初に確認した。その後、現地審査対象作品を選定する書類審査に移った。応募資料の内 容を丁寧にト レースし、議論を重ねた末に、現地審査該当作品(順不同)として以下の6作品、 ①さくらインターネット石狩データセンター、④陸別小学校、⑤TU3、⑦函 館市縄文文化交流 センター、⑧真駒内 土間のある家、⑩札幌市円山動物園 は虫類・両生類館が選定された。現 地審査は、委員7名の過半数の参加を原則に3回に分けて実施された。

6月9日に、①さくらインターネット石狩データセンター、⑧真駒内 土間のある家、⑩札 幌市円山動物園 は虫類・両生類館、7月13日に④陸別小学校、8月2日に⑤TU3、⑦函館市 縄文文化交流センターの審査を周辺環境から建築空間の内外まで詳細な観察と、設計者やクラ イアントからの説明や質疑などを行った。最終審査会は、8月29日、札幌市内で開催され、 現地審査作品を対象に最終選考が行われた。選考審査は、各委員が各作品に対する見解を述 べたのち、候補作品の設計者と同一の組織に所属する委員がその後の選考から外れ、候補作品 全体について議 論、さらには、個々の作品の評価と意義が整理され、長い討議になった。その 選考過程で、6作品よりも、①さくらインターネット石狩データセンターが選考 対象から外 れ、5作品に絞られた。その上で、各作品に対して評価と意義がもう一度整理された。評価の 指標は前述の3つの視点からであったが、その3つをす べて満たすような作品については該当 する作品を見いだすことはできず、本年度の北海道建築賞は該当無しという結論になった。そ の後、建築奨励賞の選考に入り、5作品に対して各委員より再度評価を行った。その結果、⑦ 函館市縄文文化交流センター、⑧真駒内 土間のある家、⑩札幌市円山動物園 は虫類・両生 類 館が選考対象から外れ、最終的に委員全員の合意によって「陸別小学校」と「TU3」を本年 度の北海道建築奨励賞とした。

「陸別小学校」は、北海道の中でも特に寒暖の差の激しい気候条件に立地する小学校として、 子どもたちが長く暮らす内部空間をオープンで枠 にはまらない教育空間として成立させてい る。その核となる空間が三次曲面の屋根を持つ多目的ホールである。周囲に特別教室を接続さ せたその空間では、子ど もたちの様々な活動が許容され、教育の「場」がアドホックに生じる。 地方都市の小規模校ならではの、人間同士のふれあいを大切にした公共施設の持つべき質 を獲

得した好感の持てる作品として評価できる。

「TU3」は、作者の自邸として、その家族像を色濃く反映した空間構成に特徴を持つ。一見すると図式的な平面構成であるが、最小限の曲面 壁によって必要かつ十分な生活の「場」が巧みに獲得されている。しかも、それらを構成する建築構成単位には、作者の緻密な技術へのこだわりが見て取れ、洗練されたデザインと快適な生活を両立させることができる北海道の住宅建築の新たな方向性を伺うことができる作品である。今回建築奨励賞になったこの2作品から見えてくることは、単なる空間ではなく、建築を使う人間が活動する場所をどのように構築するかについての作者のこだわりである。2つの作品は、小学校と住宅といったジャンルの異なったものであるが、この場所の獲得のために様々な建築技術を洗練させながら用いている。しかし、それらの技術は、数値で表せる快適性を求めるためだけに用いられているのではない。建築性能を数値化してあたかもそれだけが快適性を表す指標であるということが、住宅にも公共建築にも蔓延する中で、本来、建築を使う人間にとっての、人間のための場所とはどのように獲得され、あるいは獲得するのかをこの2つの作品は、問いかけているのではないだろうか。これは、古典的な命題とも言えるが、北海道建築賞の評価軸としての規範性の解釈として改めて今回の選考で光を当てることができたのではないかと考えている。

現地審査6作品のうち、4作品は残念な結果となったが、評価の要点を以下に述べ、今後の活躍に期待したい。

さくらインターネット石狩データセンター：

高度情報化社会の基盤となるが故に、その安全性と持続性が最高度に求められているデータセンターである。北海道の寒冷な気候を活かして、外気を直接サーバーから出される熱の冷却に使うというシステムを採用した。しかし、まだ全体計画の1/4程度しか稼働されていないのに加え、夏期のデータがなく、冬期、夏期合わせた年間における運用実績からはじめてこの建築が採用したシステムを評価できるであろう。

函館市縄文文化交流センター：

縄文期の遺構や遺跡などが豊富に出土する地域において、国宝に指定された中空土偶が発見されたことによって、その展示も含めた中核施設をつくることを目的に行われたプロポーザルにおける実施作品である。長く湾曲する壁を前面道路と古代の遺跡群を隔てる結界として屹立させ、それに沿って展示空間を配置するという構成は、施設の目的とも合致し、好感が持てる。また、教育委員会の担当者との歴史展示だけではなく体験的学習を織り込んだ総合的な博物館

のあり方に対する追求も、これらの公共施設を設計・建設しようとする時に必要不可欠の姿勢であり、評価できる。しかし、残念なのは、国宝の安定的保存を最大の目的とする文化庁とのやりとりの中で、将来遊歩道などの整備も検討されている遺跡側への開放が果たせなくなってしまい、展示と実際の遺跡体験というダイナミックな構成が取れなかったことである。今回の審査を通じて感じたこととして、今後の公共施設の質を上げていくために、設計者と施主である行政、さらにその監督官庁の間を調整できるコーディネータ役において、設計段階の調整を進めることが必要であるということである。せっかくプロポーザルまで行っていながら、その意図が実作として結実されないのは、このような調整役がプロポーザル後にもプロジェクトに関わっていくことの必要性を如実に表している。

真駒内 土間のある家：

設計者と施主との寄り添った関係と、施主の要望を巧みに実現することのできる力量を兼ねそなえた設計者だからこそ達成できる施主のライフスタイルがそのまま内外の空間に表現された住宅作品である。上質なものを上質につくり上げる方向性には、敬意を払いつつ、その過程には、すでに既視感的な結果が想定され、建築というものを通じて発揮すべき、先進性への希求が見えなかったのが残念である。

札幌市円山動物園 は虫類・両生類館：

建築環境の視点から動物の飼育環境と展示という2つの機能を持つ施設を見直すという新たな姿勢に大きな可能性を感じつつ審査を行った。結果の展示だけでなく、飼育の過程などを見せるプロセス展示など現代のミュージアム計画で求められているテーマを取り込んだり、は虫類・両生類という飼育に特異な温熱環境を必要とする生物の管理を建物総体の室内環境技術と連動させるなどの挑戦には好感が持てる。しかし、かなりタイトな面積設定だったとは言え、見る側の人間にとっての「場所」をつくり出す配慮が足らなかったところが残念である。新しい時代に対応する園舎を本当に望むのなら、設計者側の提案に応じた面積に対する融通性が発注者側にもあってしかるべきである。公共建築の質をどのようにつくるかを改めて考えさせられた作品である。

(文責：小篠 隆生)

第37回 北海道建築奨励賞

植田 暁 君 「TU3」の設計

描かれた平面プランと実際の空間から受ける印象が大きく異なる建築である。図面から受けた印象では、四角い箱にアメンバー状のコアが4つ入っているだけの空間で、隙間の変化と連続性が面白そうだと思いつつも、それが最近の建築によく見られるシンプルな不定形空間に類したものなのか、そうではなくて独特の力を持ったオリジナルな空間なのかは解らなかった。しかし実際に訪れてみると、外部空間はこの場所の歴史的背景と街区の家並を緻密に調査してそれらの要素が織りなす文脈を周到に読み解いたうえでさりげなく構成されていた。静かに存在を主張しつつも決して突出せずに微妙に周辺と調和した佇まいは秀逸である。内部空間は全く予想できなかった力強さに溢れていた。

設計者は薪ストーブコーナーについて「火を慈しむ原初的な経験の場を維持したい」と説明しているが、そもそも人が憩う場所とは窪みであり房である。数万年の昔から人々は洞窟などで暮らし続けて、その後住居を作り出したがその原点は房である。そこで生きることの基本は食う・寝る・育てる・作るといった行為であり気・光・火・水が主要な要素であることは現在でも変わらない。

この家は原初的な空間に満ちている。房としての空間があり、太古からの感覚を彷彿とさせながらの21世紀の生活を成り立たせている。洞窟・堅穴住居・伝統的歴史的住居・近未来的非個室型住居など古今東西の様々な住まいの要素が凝縮されている。4つのコアのうち、分厚いアクリルの曲面で囲まれた中庭は、ショールームのような冷たい硬さを予想したが、むしろ鈍重でシンプルな光に満ちていて、月明かりの時を是非とも経験したい想いにかられた。

寝室は、3人という数に規制されるものの、まさに地下住居のような房そのものである。イングルヌック（スコットランド語で暖かく居心地の良い場所）と名付けられた薪ストーブコーナーも、火と人との縁のようなものを想起させる。小部屋は、頭だけ空中に出せる小さなトップライトと相まって楽しく籠れる場所である。四角い外壁に囲まれたコア以外のスペースはもちろん単なる余白ではなく、主要な生活スペースであり、連続的に変化する濃密な空間で作る・食べる・くつろぐ・読むなどの行為が行われる。

直線的均質空間の中での暮らしは数千年の歴史を持っているが、この家の不定形空間は数万年か数十万年の時の流れが息づいているかのようである。水平力を負担する断熱パネルや、枠を見せない開口部・隠しスイッチなどの突詰められたディテールも傑出した完成度の一端を示

している。なによりも評価したいのは、この建築には永くゆったりとした時間が感じられ、人間の遺伝子的感性を刺激して、住居の根源を垣間見せてくれることである。

(文責：平尾 稔幸)

第 37 回 北海道建築奨励賞

小谷 陽次郎 君 「陸別小学校」の設計

近年、北海道で建築される学校建築の空間の質が上がってきている。地場材としての木材の積極的な活用と、積み重ねられた寒冷地の建築技術が自由で豊かな空間の獲得を可能にしている。地域の子供達は、幼児教育、小学校、中学校を通じて同じ境遇、同じ空間で永い年月を共に過ごすこととなる。父兄を含めて考えると、地域にきわめて密着した重要な施設である。この新しい小学校も、生き生きとした子供達の活動の場として機能している、来訪者に接する時の子供達の明るい快い受け答えからもそれを感じることが出来た。陸別小学校は、既存の体育館をリニューアルして残しながら計画された、平屋建ての木造を感じさせるコンパクトな小学校である。

陸別町は、北海道の中でも寒暖の差がきわめて大きく、厳しい気候条件の地域である。小学生達の活発な活動を確保するためには、断熱、気密、環境づくりとしての設備計画等の高い建築技術の水準が求められる。環境負荷の低減のみならず、自然光や通風への配慮など、子供達の生活空間としての快適な空間を確保する事にこのプロジェクトは成功している。

小学校全体を通して、木材がふんだんに用いられている。構造材、床や壁などの仕上げ材、とりわけ子供達が肌で接する箇所は優しいディテールで木材の持つテクスチャーと触れることが出来る。皮膚から吸収されるものに対する感覚と価値観は、子供達の今後の成長に大きく左右することになるだろう。多目的ホールは、本計画の大きな特徴でもある。昇降口に接した大きな空間は、音楽室、家庭科室、理科室、図工室などの特別教室にも接し、特別教室での活動と分節されながら一体となっている。図書スペースも兼ねた大きな空間は、子供達の目的外の活動を許容する自由度の高い使い方が想像できる。空間的には、三次元の曲面で変化する空間が、大きな空間の持つ単調さを減じ、子供達の活動の新しいきっかけを誘発しそうだ。普通教室の北面に連続するワークスペースも 教室との境界を曖昧に連続し、オープンで枠にはまらない教育の空間として、魅力的な空間として実現している。山あい建つ小学校は、控えめに構成され水平線の軒線と、緩やかにふくらむ多目的ホールの屋根型のシルエットがこの小学校の性格を示している。おさえられた黒に近いモノトーンな建物の色彩計画は、緑の多い背景と合わさり、新しい風景を生み出した。子供達は隣地の木造の陸別保育所を卒業し、この新しい空間で更に6年間を暮らす事になる。この作品の持つ、地域の子供達の為のあたたかい空間の在

り方は、今後の北海道の学校建築の中で継続・発展させてゆくべき質を多く含んでおり、優れた作品として評価できる。

(文責：鈴木 敏司)